産後メンタルヘルスケアにおける　6.8 週間健診の意義

医療法人エスダブリューシー
真田産婦人科麻酔科クリニック
〇川村京子　地村美穂子　徳田彩乃　平川万紀子　平川俊夫
帝京大学福岡医療技術学部　田出美紀

【研究目的】

A 施設では、産後 1 ヶ月健診でエジンバラ産後うつ病評価表（以下 EPDS）や赤ちゃんへの気持ち質問票（以下 BN）が高値のハイリスク褥婦に対して医師の判断で産後 6 週間・8 週間健診を実施。
産後 6 週間・8 週間健診の各点数の推移から、支援の効果と今後の課題を検討する。

【研究対象】

診療録より、2021 年～2022 年 1 月に A 施設で出産あるいは産後ケアを利用した褥婦で対象群 27 名、比較群 27 名。対象群は①1 ヶ月健診 EPDS9 点以上か BN3 点以上に該当、②精神疾患合併等、③育児行動や愛着形成が気になる褥婦である。比較群は対象群と同時期に出産した褥婦で、年齢構成を揃え無作為抽出した。

【分析方法】

退院時・2 週間・1 ヶ月健診の EPDS と BN、対象群は 6・8 週間健診の同データ、産後の継続支援に関する情報を抽出し比較検討した。分析は SPSS　Ver27 で統計処理した。

【結果】

1. どの時期も、EPDS・BN とも対象群の平均値が有意に高く、BN は 8 週間を除く全時期で対象群の平均値は 3 点以上であった。
2. 時期間での得点差の分析では EPDS・BN とも退院時・2 週間・1 か月健診と比べ 8 週間健診の値が有意に低下した。対象群の EPDS と BN の時期毎の得点の相関を分析し、2 週間健診の EPDS は同時期の BN と（r=0.8)、1 か月健診の BN はその後の BN と（6 週間 r=0.9、8 週間 r=0.7）かなり強い正の相関があった。
3. 8 週間健診でも高値持続している褥婦が 4 名いた
4. 対象群の背景として、児の泣きに対する育児困難感、産後うつ、精神疾患、発達障害、サポート不足、若年妊娠、外国籍などがあった。

【考察】

1. 2 週間・1 ヶ月健診の EPDS・BN はその後の BN と相関があり、1 ヶ月健診迄にハイリスク褥婦を抽出し継続支援を行う必要性が見出された。
2. 8 週間健診の平均値の低下から、ハイリスク褥婦に 8 週間迄の積極的介入が有効な支援であることが示唆された。
3. 8 週間健診時 EPDS・BN が高値の 4 名の背景には、「児の泣きに対する強い困り感」が共通して

おり、育児支援の重要性が示唆される。

4. A 施設では産後ケアやショートステイ、助産師による 24 時間体制の電話相談や認定心理士面談等、妊娠期～産後 8 週間以降も要支援者には継続支援しており、このことが EPDS・BN の低下に影響した可能性もあるが今回は分析に至っていない。今後の課題として症例を重ね、介入の影響やハイリスク褥婦に共通する問題の検証が必要である。

【まとめ】

2 週間健診時 EPDS・BN 高値の場合、1 ヶ月健診以降も続くが、多くは 8 週間で改善をする。しかし育児に強い困り感がある褥婦は 8 週間以降も改善しない可能性がある。産婦人科は今まで 1 ヶ月健診までの関わりが主だったが、要支援者には育児サポートとして産婦人科、地域の保健師、小児科等多職種と連携して関わる必要があると感じた。